

it was interested more in saving Pol Pot and had to get the help of the Thai military in sending goods to him through Thai territory. This is sometimes said and certainly makes sense, but is it an intelligent guess or is there any evidence supporting it, I wonder. I have never seen it documented.

The few critical remarks above should not be interpreted to mean that there are a lot of flaws in the book. There are some in my view, but they are greatly outweighed by good parts. The author shows through this book as well as the previous one (*Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso, 1991) that Southeast Asian studies is not just a data-collection or public service endeavor but that it can be highly stimulating intellectually.

(Yoshihara Kunio (吉原久仁夫)・CSEAS)

Steve Heder; and Judy Ledgerwood, eds.  
*Propaganda, Politics, and Violence in Cambodia: Democratic Transition under United Nations Peace-keeping*. New York: M.E. Sharpe, 1996, xx+277p.

## I

今年7月26日、カンボジアで総選挙が実施された。選挙はHun Sen第二首相が率いるカンボジア人民党とNorodom Ranariddh元第一首相のフンシンベック党に、今回の選挙運動を通して急速に勢力を伸ばしたSam Rancy党首のサム・ランシー党を加えた三つ巴の争いとなった。しかしその後、選挙結果をめぐるカンボジア社会は混迷を極めた。まず集計過程に人民党による不正行為があったとして、フンシンベック党とサム・ランシー党が得票の再検証などを求めた。選挙委員会も比例分配方式をめぐる混乱を取捨できず、選挙結果の公式発表が大きく遅れた。8月末にはフンシンベック党およびサム・ランシー党の支持者が「民主広場」と命名された国会議事堂前の広場で昼夜を徹した座り込みとデモ行進を行い、9月に入るとデモ隊と警官の衝突によって僧侶を含む死者がでた。

「カンボジア人自身の手による選挙」としてその自律性を強調する論調が、今回の選挙に関して国際世論を中心に多くみられた。その背景には、今回の選挙が平和裏に執行されカンボジアが自前の一歩を踏み出したことを見届けることで、カンボジア国連暫定行政機構（以下UNTAC/United Nations Transitional Authority in Cambodia）の主導のもと1993年5月に行われた選挙の「成功」を確認したいとの国際社会側の期待がある。しかし現実の結果はその期待を裏切るものであり、逆に浮上するのは、5年前の国連委任統治下のカンボジアと今回の選挙において顕現した状況はどのような関連を持つのかという問いである。

1994年3月にボストンで開催されたThe American Association for Asian Studiesの例会において組織された、UNTAC活動期間中のカンボジアに関するセッションを原型とした本書は、この問いに関して議論を深める一つの手がかりを提供する。

## II

本書の収録論文と担当執筆者は以下の通りである。最初の2章では、本書の対象と主題について俯瞰的な理解を提供するため、UNTAC前史としてのカンボジア現代史や理論的な枠組みが中心に論じられる。第3章から第8章までの各章は、UNTAC期のカンボジア社会に実際にみられた具体的事象についての各視点からの分析である。

- Chapter 1. Politics of Violence: An Introduction  
*Steve Heder and Judy Ledgerwood*
- Chapter 2. Imaging the Other in Cambodian Nationalist Discourse Before and During the UNTAC Period  
*Penny Edwards*
- Chapter 3. The Resumption of Armed Struggle by the Party of Democratic Kampuchea: Evidence from National Army of Democratic Kampuchea "Self-Demobilizers"  
*Steve Heder*
- Chapter 4. Patterns of CPP Political Repression and Violence During the UNTAC

Period

III

*Judy Ledgerwood*

- Chapter 5. Persecution of Cambodia's Ethnic Vietnamese Communities During and Since the UNTAC Period

*Jay Jordens*

- Chapter 6. The Nature and Causes of Human Rights Violations in Battambang Province

*David Ashley*

- Chapter 7. The Politics of Getting the Vote in Cambodia

*Kate Frieson*

- Chapter 8. Cambodian News Media in the UNTAC Period and After

*John Marston*

内容紹介の前に本書の二つの特徴を指摘しておきたい。

まず第一は、7名の執筆者全員が、UNTACの一員として選挙準備活動の実地経験を有するだけでなく、その活動への参加以前から政治学者、人類学者などとしてカンボジア研究に従事していた点である。彼らの多くは付け焼刃ではないカンボジアに対する理解とクメール語の能力を買われ、UNTACにおいても特に情報／教育部門の分析／査定部署に配置された。そして各政党の運営によるテレビ、ラジオ放送などのモニターとその内容に関するレポートの作成、UNTACが配布したクメール語一般教育教材のチェック、UNTACに対するカンボジア大衆の反応の調査などを行った。

第二の特徴は、論述の対象が国連委任統治期間のカンボジアを特徴づけたプロパガンダと暴力に絞り込まれている点である。これは本書の原型となったセッションが、編者の一人である Steve Heder の提案によりそれを中心的なテーマとしていたからである。当時のカンボジア社会にみられた実際問題としての様々な暴力こそがその状況を理解する鍵であるとする主張は、編者一人のみでなく執筆者全員に共有されたものである。

それでは各章の内容を要約したい。

第1章では本書の主題が詳しく説明される。最初にカンボジアの政治構造の変遷が各時代の政体の特徴に着目して論じられた後、人民党、フンシンベック党、仏教自由民主党、民主カンプチア党の四派と18カ国の参加により1991年10月に調印されたパリ和平協定の問題点が分析される。さらに権威主義体制から民主制への移行に関する制度的条件や自由主義化についての政治学者による議論が紹介され、UNTACの活動のケースが具体的に検討される。これらの記述はどれも重要な指摘を含むが、「暴力の政治学」という章題の意味する内容を全体から選択的に要約すると、次のようになる。

UNTACによる選挙準備活動は、カンボジア国内各派と協力し公正で中立な選挙の実施に向けて環境を整え、民主制への移行と自由主義化を達成することをレゾナデールとしていた。にもかかわらず、1992年のカンボジア社会には民主的な移行及び民主制への移行に関して政治学者が議論してきた諸条件のどれ一つとして存在しなかった。特に Samuel P. Huntington や Guillermo O'Donnell が民主制への移行条件に関して指摘した、差違あるいは他者の正当性の容認という文化はその政治状況において完全に欠如していた。UNTACによる選挙が実施されてもこの政治的現実基本的に変化せず、その不変性は庇護主義や個性主義を必然的に伴う世襲的な政治様式を特徴としたカンボジア史上の従前の諸政体との高い連続性の中にあつた。

執筆者はここで、カンボジア人が「他者性」を規定する様々なやり方の問題こそが本書のテーマであると宣言する。なぜなら UNTAC 期にカンボジアでみられた大部分の暴力は民族的他者（特にヴェトナム人）に対して行使され、また憎々しい他者という弁別的なカテゴリー創出の営みも同時期のプロパガンダに広くみられたからである。クメール人同士の間でさえ、「ヴェトナムの操り人形」「ヴェトナムの心をもったクメール人」といった表現により他者性を刻印することで、暴力が正当化された。つまり章題の「暴力の政治学」とは、具体的には「クメールであること」(to be Khmer)

をめぐる自己と他者にかかわる表象と排除のポリティックスを意味する。そして「クメールであること」の表象という主題は、第2章に引き継がれる。

第2章で執筆者は、UNTAC期のプロパガンダにみられた「クメールであること」というアイデンティティとの対照に基づく他者イメージは、フランスによる植民地支配の経験と隣接民族からの侵略の記憶によって形成されたものだと主張する。フランスは植民地行政において「利発で有能なヴェトナム人」と「無能で怠惰なクメール人」という固定観念を採用する一方、隣接民族に比べ「品性の優越（moral superiority）を有する人種」としてクメール人を表象した。これは、狡猾なヴェトナム人や強欲な中国人に対して無力ながらも精神的に優越したクメール人をフランスの手で保護する必要があるという、植民地支配を正当化するプロパガンダの一部であった。また他方でフランスはその豊かな文化遺産のためにカンボジアを欲し、アンコール研究に代表されるフランス人学者のクメール文化研究は、高文明の黄金期として具象化された過去に根ざす共通文化の感覚をクメール・アイデンティティの核として提供した。だが現実の出来事として人々の記憶に残るのは、タイ、ヴェトナムからの度重なる侵略の歴史であった。

やがてフランスによって与えられた過去の栄光と隣接民族からの侵略という記憶を構成要素として、カンボジアに民族的ナショナリズムが生まれた。それは必ず賢く油断のない他者と非難の余地のないクメールという二元体を核としながら、「カンボジアは存亡の危機に瀕している」という言説によって肉付けされたものだった。クメール人政治家の多くがイデオロギーを超えて、「もし私の主張する正しい政治路線に従わなければカンボジアの土地、文化、慣習、クメール人種は略奪的な他者に飲み込まれてしまうだろう」と大衆に呼びかけたのである。そして最終的にこのナショナリストの言説は、「我々の只中にある他者は、カンボジアの存在への生きた脅威である」という一つの神話を結晶化させた。UNTAC期において、パリ和平協定に署名した国内各派はこの神話を復活させ、プロパガンダによってジェノサイドの過去、現在そして未来への不安をかきたて、ヴェトナム

人や対立政党の支持者を積極的に他者と規定し暴力の対象としたのである。

第3章では、国連による自己復員プログラムに参加した元民主カンブチア国軍兵士への聞き取りに基づき、民主カンブチア党が再武装化して選挙をボイコットするに至った過程が考察されている。軍隊の解体と議会活動への参加に同意して和平協定に署名した同党の選挙参加には、全ヴェトナム人のカンボジアからの撤退と既存の行政機構の拒否という二つの条件があった。しかし人権擁護を訴えるUNTACは人種主義的なヴェトナム人排斥の主張を容認しえず、また実際の選挙準備は人民党の支配下にある前政体の行政機構との協力の上で成立していた。よって党幹部が政治交渉による状況の変化に可能性を認めていた当初は武装解除が一部で進展したものの、その可能性の低下に伴い再び前線へと武器が支給された。インタビューされた兵士は若く民主カンブチア国軍での経験も浅い者たちだったため上層部の意向を直接に把握することは困難だが、各時期、各地域別にまとめられた民主カンブチア国軍の動向に関する具体的な入念な記述は十分な説得力をもつ。

第4章は、UNTAC期の人民党による政治的弾圧と暴力の実態の分析である。人民党の政治活動には、行政権力を利用した選挙人登録証や他政党の党員証の没収、強引な党員勧誘運動、他党支持者への脱党の強制などの一定のパターンが認められた。強制が効を奏さない場合は発砲などによる脅迫に及び、最終的には殺人も黙認された。人民党の運営するメディアは同党と暴力の関係を否定し犯人は全てクメール・ルージュとその仲間であると非難したが、そのプロパガンダはヴェトナム人追放を唱えた民主カンブチア党や仏教自由民主党のそれと同じく暴力への執着を強く匂わせ、人々に真の平和への期待を抱かせるものではなかった。執筆者は、選挙で人民党がフンシンベック党に敗れた原因の一つは同党の本質的な不寛容さにあったのではないかと指摘する。多数の党関係者やUNTAC職員との対話、人民党の地方事務所で入手された内部文書の分析に加え、執筆者自身が検死に立ち会ったコンボンチャム州でのフンシンベック党員Hou Leang Ban氏殺害事件に関する具体的

な記述が挿入されたことで、本章は現場の暴力性を最も生々しく伝える一章となっている。

第5章の主題は、UNTAC期を中心としたカンボジアにおけるヴェトナム人迫害の実態の解明である。ある調査によると、選挙前6カ月の間に子供を含む約二百名のヴェトナム人が民主カンブチア国軍によって殺害されたという。カンボジアのヴェトナム人は、1970年代以前から領内で生活していた漁業従事者と短期滞在で帰国する者が多い移住労働者の二集団に分けられる。政治的動機による大規模なヴェトナム人迫害は1970年代初めから頻発するようになったが、特に1979年のヴェトナムによる侵攻以降は職業や生地を問わずあらゆるヴェトナム人がカンボジア消滅をねらうハノイ政権の陰謀を担う敵とみなされ、暴力の対象とされた。人民党は同党のヴェトナム政府との関係がカンボジアの大衆に好ましくないイメージを喚起する点を自覚し、これらの事件を非難しながらも基本的に不干涉の立場をとった。UNTACも無防備のマイノリティ社会に対する物理的な暴力に対して全く無力であった。選挙後の新憲法では彼らにカンボジア国籍や市民権は与えられず、暴力は現在も継続している。

第6章は、バタンバン州における人権侵害の性質と原因についての分析である。バタンバン州はタイとの国境地帯に位置し肥沃な土地と農民反乱の伝統で知られた州であるが、UNTAC期を通して国内でも特に暴力的な地域の一つであった。執筆者はそこでみられた暴力を、民主カンブチア国軍が再開した武力闘争に関係した暴力、選挙に関連した暴力、恣意的な暴力の三つのタイプに分け、各党の幹部関係者の名前や基地のコードネームなどに言及しながら詳細に論じている。本章は、第3章や第4章とともにUNTAC期のカンボジアの地方社会における政治的現実に関して具体的な理解を与える。

第7章では、人民党とフンシンベック党の政治文化が検討される。人民党に関する記述は第4章と重複し、その分析に執筆者間で大きな意見の相違はない。フンシンベック党に関しては、その構成員やNorodom Sihanouk国王の帰還だけが国家の平和を実現するという平易な呼びかけ、Sihanouk

の名によって大衆の間に喚起されたある種の特別な愛着、そして反ヴェトナムという主張により民主カンブチア党とも接点をもつ柔軟な政治姿勢などといった特徴が最も中心的に論じられている。

第8章は、UNTAC期を中心にカンボジアにおいて設立されたニュース・メディアについての分析である。当初は人民党とフンシンベック党のみが十分なメディア機構をもち党の方針に基づく報道を行っていたが、1993年に入ると次第に小規模のカンボジア語新聞が設立されるようになった。これらの小規模新聞は販売や広告だけで経営を維持することができず何らかのパトロネージに頼ったため、構造上は伝統的なカンボジアの文化、つまり個人的ネットワークの体系内で模索された庇護関係に基盤をおくものであった。しかし同時期に外国から資本援助を仰ぐ新聞社やテレビ局が生まれ、やがてわずかながらも法人組織による新しいメディア文化が見られるようになった。

#### IV

今年8月、評者は選挙後のカンボジアを訪れた。そこで目にしたのは、UNTACの置き土産ともいえる「デモクラシー」という言葉を叫ぶ群集と、選挙活動期間中は歯に衣を着せぬ政策批判で人気を集めたと聞いたSam Rancy党首による「*Yvon*（ヴェトナム人）と結託したHun Senを倒せ！」という演説であった。また滞在中には、多数の死者を出したプノンペン郊外における地酒毒物混入事件との関連で、犯人と噂されたヴェトナム人4名が暴徒化したクメール人によって撲殺されたとも耳にした。このような今夏のカンボジア社会の状況は、本書が提示した「暴力の政治学」という視点によって鮮やかに分析されるようにみえる。

UNTACに関しては、その活動に参加した内外の人物によって多くの書籍が出版されている。しかしそのほとんどは個人的な体験記の域をでるものではない。本書がその類の著作と一線を画し当時のカンボジア社会に対する深い洞察を含むものであるとしたら、それは第一にカンボジア研究者としての執筆者たちの専門性のためであるといえる。

だが逆説的に、その専門性のため、本書は大き

な問題点をもつとってよい。執筆者たちが専門的理解の一端として度々言及するカンボジアの政治文化やその伝統の内容に関して、本書では具体的な検討が何ら加えられていない。執筆者が文中で断っているように、本書は事前に計画された調査の報告ではなく、UNTACで自らの任務を遂行しながら各執筆者が得た経験をもとに構成されたスナップショット的作品であるので、カンボジアにおける文化や伝統の再検討などはないものねだりなのかもしれない。しかし生々しい当時の社会状況が、文化や伝統に関するある特定の言説のパターンに収斂させられてしまった印象を受けるのは残念である。

この本書の問題点は、第二次大戦後直ちに発展したとはいえないカンボジア研究全体の進展状況との関連で理解する必要がある。1960年代によくアメリカの人類学者 May Ebiara らのモノグラフが上梓されたものの、周知のとおり、1970年代初めからのカンボジアの社会情勢は外国人研究者による国内調査を許すものではなかった。それでも David P. Chandler や Ben Kiernan らを中心

に、歴史学、政治学、国際関係論的な手法による研究が進められてきた。また1990年代からの国際情勢の変化に伴い、開発援助論的な見地からの研究も増えた。

しかしようやくその蓄積と関心の幅を増し始めたカンボジア研究は、同時に大きな困難に直面することとなった。それは、カンボジア社会に関する実証的な社会誌の長期間にわたる欠如である。そしてこの結果、紛争あるいは革命以前の「伝統的カンボジア社会」や「カンボジア文化」といった概念を十分な批判検討を欠いたまま援用し、その後のカンボジアにみられた諸事象の理解に決着をつけようとする安易な研究姿勢が目につく。つまり、本書の問題点は近年のカンボジア研究に共通した宿痼であるといえる。

本書の第3章以降を中心とした社会状況のディスクリプションは、1993年のカンボジア社会に関するある種の社会誌として重要な価値をもつ。それを可能とした執筆者たちの取り組みに敬意を表したい。(1998年11月脱稿)

(小林 知・京都大学人間・環境学研究科)